

# 羽 仁 も と 子

## その生い立ちと思想形成

鵜 丹 谷      三 千 代

羽仁もと子は明治6年（1873年）9月8日、南部藩の城下町、青森県三戸郡八戸町長横町6番地、士族松岡登太郎、美和の長女として誕生した。父は免許代理人（いまの弁護士）で法律事務所を開いていたが、松岡家に婿養子に來た人であった。もと子の性格の大部分はそっくり祖父忠隆のものを受け継いでいるようである。彼女の家は曾祖父がはじめて、士族といっても古い家ではなく格式ばった仕来りもなく家長忠隆のまっ正直なはっきりした性格とももの考え方が松岡家を支配していた。祖母は祖父とは反対に、理数的な才能はなかったが実におおらかで円満な人柄であった。よく夫を信じて賢く従順に奉仕していたので、夫婦間は美しいものがあつた。とかく人には敬遠される祖父に、誰にもやさしいさっぱりした性格の祖母がついていることは、松岡家をいつもにぎやかにしていた。この祖母は、もと子の母が子供の時に來た後妻で、自分には子供のない人であったが、よい人であった。もと子の母美和は、もと子が長じてくるにつれて、「あまりにも人の好い世間見ずの婦人」として目にうつってくる人柄のようだった。

当時の普通の士族や町家の婦人と同じように、祖母も母も、女が字をよめると、ろくなことではないとして文字を知らなかったし、家族が一つの席に集まって食事をする慣わしは松岡家にもなかった。

父は賢く、器用な人であった。父の兄は土地では一番大きな銀行の支配人で、先代のころは貧しかったのを、めきめき地位も出來、富もつくって、もと子の家の裏合わせに八戸ではじめての三階建ての広い家を造り住んでいた。その伯父は背の低い肥ったあばたのある人であったが、器量人というような、子供にでも婦人にでも、誰にでもその対応の氣持のよい人であった。しかし、我慾横着というようなことが、その弊害として出てくることなのであろうか、もと子の父は職業柄、またその性格の弱さから、この伯父の実利主義に手を貸してしまうのである。そこで、祖母の妹婿にあたる、<sup>みなもと</sup>源 というおじが、祖父に頼まれて何度か登太郎の仕事のこと、品行のことを注意したがあまり効果がなかった。後日、父の実家のその伯父と叔父、それに父は、銀行のことで訴えられて収監された。そしてもと子の父だけは予審免訴になったとき、祖父は「登太郎は悪いことの出來ない人間だ」といって喜んだ。しかし、もと子は「悪いことの出來ないだけではだめである。人は押しき

ってよいことが出来なければ、悲しいことが起こるものだ」と後年述べている。

父はその時はすでに松岡家から離縁されている。祖父は、祖母、母、もと子呼んで、「残念なことだが登太郎は離縁することにした。家名にかかわることをしているから致し方ない」といった。それに対して母が「申しわけもございません。私も心をきめております」と祖父に頭を下げているのをみて、もと子はただ驚きと悲しみにショックをうけながら、父の在宅中の2、3カ月前のことを思い出していた。

——父はその宵は珍しく家で、新座敷と呼んでいた一番外の塀に近い部屋で、寝転びながら新聞を読んでいた。もと子はそんな父に何かいいたいような、いわれたいような気持になって、そのそばにいた。すると外で、「秀ちゃん、おまちなさい」と土地の人でない声が聞こえる。はっとしたもと子は一人で門の外に出てみると、一目でそれと思われる女が、家の中をのぞいていた。もと子は鋭く、「人の家をのぞくのはだれです」ととがめた。するとその女はびっくりしてお辞儀をして行ってしまったが、まだ別の女がそこに立っているのに気がついた。もと子は家の中に引き返して、そのことを父にいった。そしてお父さんがあんな女を相手にするのは嫌だといき切った。するとひどく意外な顔をして、父はその場をいい加減にあしらって座を立とうとした。もと子はそれが承服出来ない。はっきりした返事がほしいのである。父の前に立ちまわかってまともに返事を迫った彼女に、父の大声と共にビンタが二つ三つとんだ。生まれてはじめてのことである。もと子はその場に卒倒してしまった。気がついた時は別の部屋にねかされていた。

それからまだ幾日もたたなかった。螢とりに2、3人の友だちと連れだってもと子は、本寿寺という日蓮宗のお寺の前の田圃に行った。そのそばに祖母の弟の家がある。そのおじは登太郎の暢権社という法律事務所に来る人で、もと子の父を尊敬している人であった。そのおじがひょっこり田圃に出てきた。もと子は「七郎おじさん、お父さんは社にいるの」と聞いてみた。すると、「いない。いろいろ用があるんだが」と妙に心配そうな顔をした。それをみて「私を〇〇（料理屋）につれて行ってちょうだい」とおじに頼んでみた。おじはしばらく考えたあと、決心して「つれて行こう。一度家へ帰るか」といった。もと子は家へ帰って着物をきかえたりして出ることは、何だか気がひるんでしまうように思えて、このままでよいと答えた。友だちには用ができたといって七郎おじと〇〇へ向かった。そこは、女たちの部屋らしくて、いろいろなものがあった。一番年をとった女が、美しい箱に何かを入れて、お嬢さんによいものがあるからあげましょう。ほんとうに可愛そうね、ご心配あそばして。しかし決してご心配はございませんよ。私たちがついておりますから。などといってとりなすのに、もと子は「ありがとう。ほしくありません」とつぶやいていた。別室からまもなく父が出てきて、「今すぐ帰るから」というので一足さきにもと子が

帰宅していると父も帰ってきた——そんなことがあった。それなのに、もう父の居場所がなくなってしまった。その悲しさが彼女の胸いっぱい広がってきた。もと子の11歳の時であった。

もと子は小さい時から健康そのものであった。当時、冬になると、霜やけにならない子供はほとんどなかった。もと子たち兄弟は誰ひとりこの霜やけにも、また八戸の風土病といわれる名物のおこりにもかからなかったが、わけでも、もと子は丈夫な子供だった。食べ物にも偏食はなく、ただ、さしみのような生ぐさいものは嫌いで、玉子焼のようなものや、ご飯も、おこげのついたものを好んで食べた。睡眠は、幼いときから老人になるまで、夜おまそくとも9時には床につき、夜中に1、2度目覚めるがすぐに眠り、朝の6時にはすっきりと起床する習慣であった。

以下、もと子の小学校時代から時代別にその勉強と生活と仕事について述べ、その中から彼女の思想形成を探ってみたい。

## 1. 小 学 校 時 代

もと子のはじめて小学校に入学したのは5歳9カ月の時で「梅桜桃梨一時に開く4月の末から5月にかけて」の頃であった。もと子は、「暫くぶりで乾いた土を踏み、暖かい日に照らされて、大人も子供もよみがえる。私はその頃はじめて学校にゆきかけてどんなに楽しかったか」とも記している。

こんなことがあった。もと子は学校の帰りに学校の近くの大きな家の板塀に、持っていたこうもり傘をたてかけて置いて、一人で遠くまでおはじきをする小石を拾いに行った。両手いっぱいになって戻ってみると傘がない。あちこちと見まわしていると、通りがかりの女が、さっき男の人が警察に持って行くのを見たという。もと子はせっかく拾った小石をそこに投げすて、憤然として警察署に入ってしまった。正面のテーブルの前に腰かけていたおまわりさんはその小さな女の子の申し出に、半ば面白半分に質問した末、にやにや笑いながら傘を返してくれた。けれども面白くないのはもと子の方である。なにも落したのではない。置いたものだ、そういう心持が相手に充分伝わらないもどかしさもあった。家に帰ってもそのことばかりが思われてならなかったが、家人にはだまっていた。ほどすぎってから、「長横町の松岡家のお嬢さんがひとりで警察に落しものを取りに行った」という評判がいつしか家人の耳にも入った。

そんな性質は誰にでも可愛がられるたちのものではなかったのであろう。可愛がられないばかりか、むしろずい分意地わるくされたようである。そのつどもと子はどうして自分

が大きい人たちに嫌われるのかをいつも考えているような子供であった。

このように彼女は、なすことは人並み以上に遅く無器用だが、考えることは人並み以上に綿密であった。そうした8年間の具体的な例をもと子の「半生を語る」から、拾いあげてみよう。

(1) 学校の課題のコップの絵がどうしても描けない。一度寝てから夜中に起き出して、机のまわりが図画用紙でうずまるほど描いても描いても描けなかった。

(2) 1に1たす2, 1に2たす3, 1に3たす4というような算数を掛図をかけて習った時、どうしても早くいえなかった。1に1をたすと2だなあという風に、一々考えてからいおうとしていたのだろうか。毎日毎日それに苦しんで、ある晩とうとう祖母に訴えて、どうして出来ないの、と泣きながら祖母の手を引っぱり家中を歩きまわって困らせるのであった。そのうち祖父も出て来て、それはこうだろうといってくれても、もう無茶苦茶になってしまって、そうではないというので、夜中に弓張提灯をつけて、祖父が校長の所に聞きに行ったことがある。

(3) 文字を書けないことも類い稀れなほどであった。しかし、それは小学校を卒業したころちょっとしたことから、ほんとに愉快に覚えることができた。<sup>からすまるちよう</sup>烏丸帖というかなのお手本をじっと見つめていたときに、字の調子というようなことが、はじめてもと子の目にうつってきたのである。——やがて物にはすべて調子があることがわかってきた。字ばかりでない。運針も出来なかった。裁縫はなおさらであった。

(4) 遊びごとでもてまりは上手につけたが、お手だまやおはじきは苦勞してもよく出来ない。氷すべりなどもそうであった。

(5) 今の国語や漢文や算術や、歴史地理、理科はみな本で習った。そういうものは、非常にくわしく読んで、出来るだけ考えていたから、小試験にも大試験(学期末試験)にも、いつも百点ばかりとった。作文は早くから、◎や◎をとっていた。

(6) 中等科の4級3級のころになって、平方に開く立方に開くということが分からなかった。教えられれば術は誰にでもすぐわかり、教えられた通りやればすぐ出来るというのが変に気にかかった。式や答はちゃんと出来ても、それを自分の実際の経験と推理を通して証拠だてられた知識にすることが出来なかったのである。長い間考えて、比例と利息算のわけは自分で合点した。

(7) ある親しい女友だちの身に起きた事件である。授業中、男の子がおならをしたのに、誰かがまっ先に彼女の名前をあげてしまったのである。そこでみんなが笑った。それ以来、彼女は「屁たれ」とからかわれるようになり、とうとうノイローゼになってしまったのであった。もと子は、その時自分がすぐに立って、みんなの前で彼女のことをそうではない

と主張し得なかったことを残念に思い、「時機」はのがすものでないことを一生涯の大いなる教訓とし得たが、それと同時に、その友だち自身もはっきりとそれが言える強さ、卒直さがほしかったと痛感した。

(8) 男女共学の中で、男子は大勢のときは女子に人一倍いろいろなことをいうが、ひとりいるときはたいへん弱いものだということがわかった。

(9) 「宅前の平地には、しば（芝）を植えたるよき景色の所あり」という先生の講義に、庭にしば（柴）を植えたら、景色も何も見えないだろう。どうして庭に柴を植えるのかなどと、いつまでもこだわっていた。「しば」という字の意味が他にあることを知らなかったからである。そういった類いの疑問は馬鹿げたものだということをあとから知った。

(10) 明治17年、文部省から、全国の学校の特に優秀な子供や篤行の著しいものに表彰があった。八戸の小学校からは、男女三人の生徒が推薦され、もと子はその一人であった。

以上のいくつかの例のようにもと子は、その小学校時代から、分からないことをそのままにしておけない生真面目な性質をもち、自己に対しては厳しい内省をする人であった。それに、真理探求への強い性向は、どんな苦しい問題に対処しても、そこから決して逃げることなく、まともに対決していくのであった。そこから、彼女は苦しみの裏に必ず楽しみのあることを体験を通して知ったのである。

もと子に与えられていた天性の資質は、その生まれながらの健康体と明晰な頭脳と事理をどこまでも追求して止まない強い意志であったが、その性質の中心にはやはり正直さと私心のなさと構想力の確さがあった。時あたかも明治の揺籃期に生まれ育ったもと子の鋭い観察の目は、維新以来の文明開化の波を背景として、子供ながらもたえず明治の教育にその問題点を追っていた。後年、もと子が自由学園を創立したのは、その必然的な結果であったといえよう。それはまた、まことのものを求めて止まない精神と、明治維新という大いなる時点に立って、日本をこよなく愛して止まない心と、広く世界に目を向けて、万民と共に生きていこうとする開けた心でもあった。

## 2. 女 学 校 時 代

明治22年（1889）2月、16歳の時もと子は上京する。

小学校を終えて1年、東北の小さい町にも盛んになってきた英語の学習を2人の先生について学びつつ、勉学のために東京に出たい希望を祖父に申し出ていた。

その願いがかなえられて、江戸勤番で東京に比較的明るかった祖父につれられて、折から開校されることになっていた東京府立第一女学校に入学のために、人力車や櫓を乗りつ

いで、仙台から汽車に乗り、一週間近くかかって東京に着いたのは憲法発布式の行われる直前であった。

もと子は入学試験の結果、3カ年修業のところを他の24人と共に2年前期に編入されたそして、それは最上級であった。彼女はそこでもよく出来る生徒ではあったが、学科の勉強よりも、東北から出てきたもと子には「東京」そのものが真剣な興味と問題になってしまった。

しばらくして、同じ学級に新しく入って来た友だちが、はたの冷笑にも頓着しないで、お弁当を頂く時にいつもしばらく頭を下げているのに感心したもと子は、ある日そのことをその友だちに聞いてみた。もと子はそれがお祈りであることを知り、誘われるままに築地明石町教会に行き、そこではじめて見る西洋文化のさま、その他そこにくる人々の様子一つ一つに驚かされつつ、キリスト教を次第に理解していった。当時、彼女の入った日曜学校の級の担任は、福沢諭吉の五女で社会奉仕に尽力されていた、潮田千勢子夫人であった。

明治24年(1891)、もと子は府立第一高等女学校を第1回生として卒業し、当時女子の最高教育機関であった女子高等師範を受験した。彼女の組から三人受けたが、もと子だけが失敗したことから、八戸にいた時のように集中して勉強しなかったことを強く悔い、また、信仰の面でも、やがて小方仙之助牧師から洗礼を受けるまでになった。それはもと子が17歳の時であった。

#### (1) 明治女学校に学ぶ

もと子はもっと勉強したかったので、やはり当時新しい教育で最高級といわれていたキリスト教主義の明治女学校の高等科に入りたいと思った。しかし祖父がもともともと子の上京を躊躇したのは下にも妹や弟があるので多くの学費を出せないといっていたことから、また、もと子は自分の弟を福沢諭吉の学校(慶応)に入れたくて、自分の学費を弟にまわすように国元に言ってしまった手前、この問題に苦心した。

思案の末、もと子は勇気をふるって、明治女学校長、巖本善治に手紙を送り、入学の切なる願いを書いて二度も出したが返事はなかった。次には直接、女学雑誌社に訪ねて巖本に会い、なにかのご用の下働きにお使いくださって、そのひまひまに、いくつかの講義を聞かせていただきたいと懇願した。その熱心さに動かされた巖本は普通の入学志願者と同じ扱いをしてくれた。そして月謝免除のほかに、女学雑誌の仮名つけの仕事を与え、それが寄宿料になった。

#### (2) 寄宿生活

明治女学校の寄宿舎には、100人余りの学生がいた。その規則正しい進歩的な生活は「の

ろくさしている田舎ものには容易なことではなかった」が、それはまた心身共に快適な世界でもあった。第一高女時代に学校そっちのけで夜おそくまでさまざまな本を読み散らしたおかげで卒業前の半年ほど毎日悩まされていた頭痛もここでは2、3カ月のうちになおってしまった。

日曜日には一番町教会（のちの富士見町教会）に行った。もと子はそこではじめて植村正久牧師の話を聞いて非常に感動した。寄宿生活の夜は、7時から一同講堂に集まって、夕の礼拝をする。そのあとすぐ、そこで復習をするのが慣わしであった。もと子はその時間によく女学雑誌の仮名つけをした。後年、彼女は自分のために仮名つけの仕事を「職業として与えて下さった先生のご親切と、それに対する余計な手数やお心配りを、人を使う身になって、私ははじめてしみじみ思い当たるようになった」と述懐している。また、そのおかげで、巖本夫人若松賤子の有名な『小公子』の校正をすることもでき、のちに報知新聞の記者になることもできたし、更にその経験を生かして『婦人之友』を編集することもできたのであった。

### (3) 明治女学校とその滅び

明治女学校に入学してから第2回目の夏休みになって、もと子は郷里八戸に帰った。もと子はそのままとどまって、ちょっとの間ではあったが間もなく小学校の教師になった。

「上京前には学問に己を忘れ、上京後は、目にふれ耳に聞くすべてのことに強い興味を覚えて、1年も2年も3年も本当に夢のように過ごしてしまった」もと子の心には、男性との愛情が成長する機会はほとんどなかった。反対に、小学校教師時代はわずかな期間であったが、「身も心も打ちこんでするほどのこともなく、他の刺激や指導者なしに十分に考えるほどの材料を一人ではつくり得ない」時代であった。

彼女は明治女学校に帰ったほうがよかったかも知れないと思いはじめる。しかし、もと子によれば、そのころの明治女学校は、「爛漫たる才華のなかに、理もあり情もありながら、生ける信仰を欠いていた。その聡明さはキリスト教思想は解していても、本気に神に仕えようとはしていなかったであろう。そのために美しい学校がとうとう魔の国へさらわれて行ってしまった」のであった。思いも行ないもまだ定まっていないうもと子が、もしその中にいたとしたら、あるいは困った影響を受けていたかも知れない。しかし、同時にもと子は「明治女学校と巖本先生は私の恩人でまたは恩のある学校である。また私の生涯に画時代的な進歩を促してくれた学校である。また私はその短かった全盛時代に、そこに置かれたということも感謝すべきことである。私は今もすでに滅び去った明治女学校を忘れることができずにいる」とも述べている。

### 3. 教 員 時 代

そのころ、もと子の第一高女時代の友人が急に結婚のため退職するので、その後任にどうかという話があった。それは盛岡のカトリック系の女学校（白百合学園）で、彼女はそれを承諾して、早速赴任した。ここでも寄宿舎にいたので、尼さんたちの生活や親切さを見ることができた。彼女の忘れることのできないことは、学校の近くに教会があって、いろいろな時のミサにたびたびつれて行ってもらったこと、夜中にはじまる天主教のクリスマス礼拝のこと、また中でも、プロテスタントを信じていては天国がないからかわいそうだといわれたことであった。

彼女にとって、「明治女学校の中には、キリスト教思想があっても信仰はなかった。尼さんのほうの宗教には、神秘的な憧れはあっても、人間の血や肉の上に与えられる信仰ではなかった」のである。もと子は17歳の時洗礼をうけた築地の明治教会以来、否、それよりもっと前から宗教に心ひかれながら、いのちの中にある生きた信仰は育てられていなかった。しかし「私は信者だと思っていた。今から思えばキリスト教道徳の中に生きたいと望んでいた」というだけであった。

ところで、ここでは「尼さんたちから床しいような、迷い深いようなお話をたくさん聞いた。明治女学校の実に社会的であったのと反対に、2時ごろ生徒が帰ってしまうと、全く世の中とは没交渉な世界」に彼女は住んでいた。かくして、もと子は天井の高い2階の狭い畳敷の部屋の一方の壁際に寝台を置き、北側の窓の下には大きい机をすえる、彼女の生涯の中でも最も多く読書する時期をここで過ごすのである。その多くの書物は当時博文館から出ていた日本文学書であった。また、廊下をへだてた南側の同じ部屋は、イタリア生まれの尼さんの寝室であった。尼さんから幾度かフランス語のけいこをすすめられたが一向に気が向かなかった。このような静かな日々を暮らしたことは、もと子にとって、それ以前にもそれ以後にもないことであった。

### 4. 結婚と離婚、および再出発の時代

世の中とは全く没交渉な世界で、もと子の心の中で息づいていたのは恋愛であった。相手は京都の人で、鉄道関係の仕事で東北出張中にもと子と出会い、京都に帰ってから手紙をやり取りし、一時は祖父の反対もあったが、ふたりは許されて結婚する。

だが、まもなく離婚するようになる。もと子が有名になったのちにマスコミは当時の事情を「姑と合わなかったのだ。激しい新旧思想の衝突のために愛を割かれたのだ。そのた



めに強い女になったのだ」など取り沙汰した。しかし、実際はもと子は姑と同居していなかったの、そういうことはありようがなかったのである。そのことについては、もと子はつつましく、「東北生まれの女学生が、先方のかぶれはじめている関西趣味に合わなかったのである」と述べているだけである。

ともあれ、もと子は「決然と自分のより大切な道をえらんだあの時、私はほんとうに健気そのもののようであった。京都からいよいよ東京行きの汽車に乗った時、いろいろの困難を予想しながら勇み立っていた」。この時の決断力がなかったとしたら、その後の大きな教育事業の指導者になったもと子のよき助言者であり同労者である夫、羽仁吉一との出会いは勿論、今日の羽仁もと子も存在しなかったはずである。

もと子は、京都から直接東京に出た。離婚のことは双方の両親にも、自分の身内のたれにも話さなかった。彼女自身「いたずらに心配をかけるばかりだという考えではあったけれども、今になってみると、勝手な高慢なことだった」と述べている。とりあえず彼女は女中にもなるのが、いちばん手っとり早いと考えて「桂庵」（私設職業紹介所）を通して行った先きが、現在の女子医大の創立者、吉岡弥生の家であった。この時、吉岡弥生は26歳、もと子は24歳であった。

彼女は女中の仕事でも一生懸命に働いた。それからしばらく経ったころ、吉岡先生夫妻の鋭い目がもと子の上に光った。そして書生の一人のように取り扱われることになる。一家のにぎやかな団欒の中に入れられて、医者の世界や男子の学校のことや、また先生たちの将来の大きな希望の話などを聞いている時に、彼女は別れて来たばかりの「西の国にあった世界と、閑かな北国の故郷と、人の世の幕も瞬く間に変われば変わるものと、寂しい自分の背景の前に展開されている、この陽気な幸福な世界を不思議な気持で」しかも、幸福な気持で味わっていた。

## 5. 新聞記者時代

やがて、もと子は吉岡弥生に他の仕事を探すことを許されて、報知新聞社の掲示板に「校正係を求む」という字を見つけ、飛んで行った。しかし受付係は、「校正係は男ですよ」とてんで相手にしてくれない。もと子はそんなことでひっこんでいる性分ではない。その翌日、『女学雑誌』校正の経験があるから実際に試験してみて採用してほしい旨と、さらに女の身で従事してみたいわけをくわしく書いて、その封筒は男名前にして持って行った。朝のうちでまだ受付係が来てなかったので、「頼まれて来たのです。係りの方へ上げて下さい」と出て来た小使頭に履歴書も入った封筒を手渡した。その時のことをもと子

は、「うそでよいことが出来たと思ってはならない。悪気ではなく、本当に一生懸命だったので許されたのであろう」とその後もたびたび自分にいうのだった。

翌日、報知新聞社から「来るように」というはがきがついた。行ってみると編集室に通された。男だと思ったのが女だったので、編集人たちもとまどったが、けっきょくどんな変わり種の女か、試しに当分使ってみようということになり、次の日から出勤と決まった。

そのころの新聞社の編集局は、印刷の工場との間を金網で区切られているだけであったので、工場の職工たちは編集局を動物園といていた。そこにはじめてもと子が入って来たので、彼らは動物園にメスが来たといって大さわぎをした。彼女の役目は校正係であったけれども、その丹念さ正確さが信用され、そのうちにもと子の書いた原稿が採用されるようになり、校正係から婦人記者になった。日本最初の婦人記者であった。

もと子の原稿は、当時の美文的な文章でなく、男にはない精密な観察を素朴に書いたものだったので好感をもたれた。また、男子記者では気づかないような家庭、婦人、教育などの方面の記事を報道し、さらに、星川清子という筆名でまとまった記事も書くようになった。

しかし、先例のない婦人記者なので、訪問、面会、質問、対話などにもいろいろ困難が付きまとった。もと子はこのことについて次のように述べている。「私に向かう侮辱や反感や一種の虐待は、世の中の臆病や負け惜しみや愚痴や無理想から出ていた。そうして私に対する同情と奨励と、どこから来るとも知れないいろいろの援けは、世の中の真実と聡明と良心とから出ていた。実際個々の場合についていえば、全然の悪意無理解にある場合はほとんど少なく、全然の好意や奨励を感じて感謝する場合がずっとずっと沢山あった。……私はその中で人の心に浅さ深さのあることを本当によく知った。そうして自分は出来るだけの深い心をもって、その深い真実をそのときどきの小さい気持ちに妨げられずに、まっ直ぐに言ったり行なったりすることが大切だと思った。人中にもまれていじけて行くのは、負け惜しみや反感が強いからである。涙の多い正直な心で人にもまれるとはじめは味方に対する愛と感謝が深くなり、だんだんに敵に対しても理解と思いやりが深くなるばかりである」と。

彼女を「苦勞」が囚えるよりも、いつでも「希望」が近くに待っていたのは彼女の強い信仰によるところが大きかった。もと子は、「人は自分で自分を放棄しないかぎり、放棄しないばかりでなく、健気な心を持っているならば、この世の中には多くの哀感を<sup>\*\*\*</sup>掩うてあまりある慰めの力が愛の泉のように湧き流れている」ことを自分のさまざまな体験からも信じられるようになっていた。それは、離婚を決心して上京した後、わずか半年を経ただけの頃であった。

## 6. 羽仁吉一との愛と志の出発時代

もと子はふたたび恋をした。相手は自分より7歳年下の、22歳の若い優秀な山口県出身の同じ編集局の記者、羽仁吉一であった。これは決してもと子の一方的な恋ではなく、両方のゆるがない恋愛であり、もと子にとっては「愛と志の同時に許される」結婚であった。結婚は明治34年2月であったが、結婚と同時にふたりは心を合わせて雑誌を出す計画をたて、着々とその準備をはじめたのである。

### (1) 家 庭

経済的には苦しかったが、当時では珍しい共かせぎ夫婦であり、従来の「家」という考え方を「家庭」というものにつくりかえ、思いきって母中心の家庭にしたのである。決して今までの夫唱婦随の家庭ではなかった。さりとて、夫の方が妻の言いなりになっている家庭でもなかった。ふたりはまったく対等であった。激しい議論もやった。欠点や短所を互いにうめ合わせながら、たがいの長所をのぼし、それぞれ思うところをりっぱに成し遂げた夫婦であった。

### (2) 『家庭之友』創刊

夫婦は、一人は書き一人は経営の任に当たって、雑誌をもって世と友とに話しかける『家庭之友』を創刊した。それは、長女説子が生まれた1903年のことであった。

「私たちの家庭生活は、私たちの仕事の中心点であり、仕事は家庭生活の延長である。そこに私たちの事業の特色も家庭の特色もあることを感謝する」——これが羽仁夫妻の家庭であった。しかし明治30年代当時の社会では昔ながらの封建的な結婚が支配的で、夫婦、親子をめぐる深刻な家庭問題をひきおこし、家庭の悩みは深かった。こうした変動に直面する日本のためによりよい家庭を打建てようとの羽仁夫妻の理想が『家庭之友』として結実したのであった。

夫の綿密な経営面の才能と妻の豊富な実際経験をもとにして、家事整理、主婦の時間割、料理、裁縫、育児、家計などにわたり当時はまったく新しかった研究をとりあげたことがたいへんな反響をよんだ。しかし、そうはいっても、現に母であり主婦であるもと子にとってさえ、ほとんど知らないことばかりだったので、専門の知識とすぐれた経験を持っている方々を訪問して熱心に教えを受けた。そして、自分でもひとつひとつ実験を重ねた結果を誰にでもわかるようにまとめ上げて、どの家庭にも活用出来るものとしたのであった。定価は1部5銭、ページはわずか32ページの小冊子ながら、抄色の表紙に見出される目次は、今日なお生き生きとした問題を提供している。

明治37年（1904）もと子は、日本最初の家計簿を案出して出版した。忙しいふたりの新

家庭の経済はいつでも予算超過であった。それは収入が多くなっても同じことだった。どうしようかと始終心にかかっているうちに、この実的なものとして喜ばれる家計簿の考案となったのである。明治39年(1906)には次女涼子の誕生をみたが(1年8カ月で肺炎のため失う)、主婦日記の発行の具体化されているのも興味ぶかいことである。また「女性にとって本当に選択された職業は、家庭生活と完全に一致し得るものであることを堅く信じています」と、その著『家事家計篇』でもと子は力説している。

『家庭之友』が『婦人之友』となって、まったく独立した経営になった時、内村鑑三が激励の手紙といっしょに1年分の購読料を送ってきた。このことは羽仁夫妻を非常に力づけた。誌上に「身の上相談」や「育児相談」の欄をつくったのも日本で最初だったが、こうして『婦人之友』は長女説子と共に大きくなっていった。

一方、大正2年(1913)、『子供之友』創刊、翌年には『新少女』を発刊しているのは、長女説子、三女恵子(明治41年誕生)の成長に伴ってのことであった。

## 7. 自由学園創立時代

『婦人之友』に18年遅れて大正10年(1921)、自由学園の創立をみた。ふたりは、それまで築かれた社会からの信頼によって、思い切って自分たちの理想を実現したのである。

「真理は汝らに自由を得さすべし」という聖書の句から名づけられた『自由学園』は女学校令によらず、各種学校としてスタートしたが、その特徴は知識学問の教育のほかに、実際生活に基づく教育、精神的訓練を通しての教育にあった。

これまでの学校という観念からまったくはなれた、自由を象徴するようなクリーム色の建物がみどりの芝生の中に建っていた。これは帝国ホテルを建てるために来日していたアメリカの建築家フランク・ロイド・ライトが設計したものである。

入学式は荒壁だけの教室に普通科1年生26人、日をおいて高等科1年生60人を迎え入れて、園長羽仁もと子は、「自由学園には先生はありません。おとなも子供も、ともに長所を学びあわなくてはならないからです。ただひとり、わたしたちに共通の変わらない先生がある。それはイエス・キリストです」と語った。

毎朝8時から礼拝がもたれた。この静かなひとときは共に聖書を学ぶ時であり、ミスター羽仁、ミセス羽仁と呼ばれる夫妻と生徒たちとが親しく人生、宗教、その他さまざまな問題を語り合う時でもあった。もと子は生徒たちに宗教や礼拝をむりやりに押しつけることはしなかった。それは日頃から「宗教心を無視しては教育は成り立たない、また、学園のつめ込みはよくない。が、それ以上に宗教のつめ込みは恐ろしいものだ」というもと子

の考えによるものでもあった。しかし、夫妻の人格と生活に感化されて、彼らはすすんで礼拝に出席するのであった。

また、学校と実際社会を結びつけるために、各クラスは「家族」とよばれる数人のグループに分けられて、家族のメンバーがお互いに協力しながら学校社会の責任を分担するようにしくまれていた。

もと子のいう「人格平等」の気持が生徒の中にもしみ通って、いっさい雇い人なしの学園の特色ができ上がった。校内の掃除・整頓・飾りつけなどのすべては生徒たちの仕事であった。さらにもと子は学園で昼食をつくることにした。あたたかいできたての昼食は生徒たちの健康にもよく、家庭的な情操を養ううえでも役立った。実際に料理のつくり方を覚えることは、もと子自身の明治女学校の寄宿生時代にそのヒントを得ていた。今日の学校給食の淵源はこの学園にあったのである。

また、学校としては、文部省の教科課程によらず、いわば社会制度の保護の外に立ち、比較的制約の少ない学校として出発したが、そのことは学科の勉強に偏していたこれまでの学校教育に、人間教育のための「生活」というものを取り入れることとなった。すなわち、知識を詰め込むのではなく、知識を媒介として各種の能力を総合的に開発しようとするのであって、このことは今やこの日本の教育界においても常識となっている。——「大きな望みは、明滅しながら長い間に育って来るもののようである。そうして本当の望みは、その間に1人のものが2人のものになり、2人のものが3人のものに、そうしてとうとうこの世の中に実現されてくるもののようである。私の自由学園を創りたい望みも、そうして今の事実になった」と、創立者は書いている。こうして「画一的な詰め込み教育でなく、子供自身から勉強の態度を引出す教育」「雇い人のない自治自労の生活」の教育の夢は、読者の家庭からおくられた26人の少女たちによって支えられ、ついに実現したのであった。

昭和22年(1947)、『教育の目的と その方法』の中でもと子は、「真の自由人をつくり出すこと」が教育の真の目的であるとしているが、その自由人というのは、まず自ら生きる努力をし、自らを教育するという自力の努力というものが核心にあって、その努力をしていく中に神の愛護と万有からの助力が成り立っていく、自らの自覚と努力の過程の中に天地の気と神の心がふれられていく——そういう人のことであった。神の愛育と万有の力によって本性が伸ばされていき、見ゆるものより導かれて見えざる神を識り、神の愛育の中に喜び楽しんでその生命を託していくことになる。これが真の自由人の姿であるという。また、人間に与えられている意志の自由を神の人間最高の贈り物であり尊厳であるとし、神の愛と経綸とその導きによって人間の創造的努力と自己実現が果たされるのであって、

それが自由の世界だと述べている。

小さな「素人の学校」と自らも好んでそう呼んでいた学校は、生徒と教師との家族的な共同生活を通して、社会の最も大切なものを見さだめて、社会に向かって働きかけていくという、家庭と社会の改善、改革への願いの下に経営されていた。そこで育てらる生徒は、生活と積極的に取り組み、創造的意欲で生活を改善していく実践力を身につけていった。それらはどこにお手本があるのでもなく、もと子の幼児時代からの生活と思索から創り出した理想であった。その思想は生活の基盤をもち、生活はまた思想に導かれ、さらに二つのものの根底に祈りがあった。もと子の「思想しつつ、生活しつつ、祈りつつ」という標語が生まれたのもこうした背景にもとづくものといえよう。

#### 8. 「友の会」結成と家庭生活合理化運動の時代

婦人之友建業25年の年、著作集の刊行を契機として各地に愛読者の集まりが生まれ、それが「友の会」となった。昭和5年(1930)、第1回の大会が東京で開かれたときには、全国の「友の会」の数は39、会員は1,000名であった。今日は全国155都市にそれぞれ友の会が開かれ、2万人以上の会員が『婦人之友』や著作集によって伝えられている人生の生き方に賛同し、それぞれの家庭をとおしてその精神を生きるとともに、少しずつその生活を世の中につたえてゆくようにはげんでいる。

昭和9年(1934)、東北地方に大凶作が起った。それを救うために青森県生れの羽仁もと子は、ただ一時的な救援でなく、根本的に東北人の生活の仕方を向上させるようにと『婦人之友』の読者、友の会会員、学園の卒業生によびかけて、翌10年の1月から東北六県にセツルメントを開き、文化にこうもおくれているところを日本のなかからなくすためにとまっしぐらに働いた。

#### 9. 戦 中 時 代

昭和13年(1938)には、1人1人の国民の日常生活がこの戦争にとって大問題であり、すべての戦いに勝つというのは、勝気な人の考える勝つとはちがって、十字架をとおして来る愛の勝利の意味であることを説き、東北ではじめて生活改善運動は、国内の出征兵士の家庭、工場勤労者の家庭の上にも種々のかたちをとってひろがっていった。

外には「北京生活学校」を開き、内には、「幼児生活団」を開いていった。

昭和14年(1939)には6カ月にわたって「先憂後楽」という表題で巻頭文をかき、昭和

17年(1942)、『婦人之友』は用紙の制限のために小さなうすい雑誌になったが、もと子はなお一生懸命にこの戦いの真の解決を祈り求めている。

もと子のもっとも排撃したのは、一方においては人間のなかの「勝気と利己心」であり、他方においては「傍観的態度」であった。彼女は、各人がその職分に忠実に生きて、日本の国内がほんとうによくなるよう、そうした真実の動機にもとづいて、人と人とが武器をもってたたかうことから1日も早く救われることを願い、すべてのことは神のおゆるしがなければ起らないのであるから、神のみ心にかなうようにして、1日も早く善い方へみちびいて頂きたいと祈りに明けくれて、制限された言論界の中でも、その心情を吐露せずにはいられなかった。

軍部からは、神至上主義のもと子の記事をのせるならば、『婦人之友』を廃刊にするといわれた。彼女はこれを聞いて、炎天下空襲のさ中を、三宅坂の参謀本部まで、70を越えた老いの身をはこんでいった。自分で首脳者に会い、真実を語ったおかげでやっと廃刊にはならなかった。

また、自由学園の「自由」という名が問題になり、他の多くのミッション・スクールも改名したのだから、他の名まえにかえるよう当局から干渉された時も、もと子は自分で責任者をたずねていって、「わたしは、自由のないところに教育はないと信じています。自由学園の名まえをかえるくらいならば、学校をやめてしまいます」と、ここでも最後まで節をまげることなく愛と確信に満ちた訴えをしている。

## 10. 晩 年 時 代

自由学園は、雑司ヶ谷から南沢へ移転し、小学校のほかに、男子部、幼児生活団を次々と増設していったが、人数はふやさないで、教育を徹底させることにつとめた。戦後にできた4年制学部も入学定員を30人までと決めている。

自由学園の歴史が、大正10年(1921)から昭和の戦前・戦中・戦後の時期を通して、自由学園という名を守り通してきたこと、時代に流されずに教育の良心を貫き通して今日に至っていることは、もと子の生涯を貫いてきた「思想しつつ、生活しつつ、祈りつつ」の歩みでもあった。

自由学園のユニークな生活教育は、世界の心ある教育者の注目するところとなり、昭和7年(1932)夏、フランスのニースでの第6回世界新教育会議でもと子は講演した。「教育と変遷しつつある社会」というこの会議の主題に対して、自分自身の実験をもって具体的に答えようとしたのが、もと子のえらんだ「それ自身一つの社会として生き成長しそうし

て働きかけつつある学校」という演題であった——われわれはよい社会を創造しなくてはならない。そうしてわれわれは、たしかにより社会を創造し得る。という自信と希望を、その体験を通して被教育者に与えること、そのことのみが、変遷しつつある社会に、最も有力なるものとして、かれらを生かしめ得る唯一の方法である——というのが、この講演の主旨であった。

戦時中に国のためと言うことは誰にでもたやすく出来た。しかし、敗戦のあとに、ますます利己主義になり、己れの事業の利を求めるに汲々とする人々の多いときに、戦時中にもまして、自覚ある個人になってお国のために尽さなければならないことを雑誌において説き、友の会と自由学園とにおいてそれを実践することは、神による信念をもつ人でなくては出来ないことであった。

「生活の朝、昼、夜」の文中にある、「朝起きて聖書をよみ、昼は疲れるまで働き、夜は祈りて眠る」という言葉は、「思想しつつ、生活しつつ、祈りつつ」を更に具体的にいいあらわしたものだといえよう。

主われをあいす、主はつよければ  
われよわくとも、おそれはあらし

わがきみイエスよ、われをきよめて  
よきはたらきを、なさしめたまえ

この愛誦の讃美歌を歌いつつ、彼女の朝毎のみ言と祈りによって、『婦人之友』と『自由学園』と『友の会』が支えられてきた。

この3つの事業はその形と表現は異なっているけれども広い意味では教育事業である。そしてその方法はあくまでも自己教育法であり、その思想の源は、幼児時代からの生活と勉強法の徹底性に端を発している。しかし、感受性ゆたかな女学生時代にキリストに出会ったことが何といても彼女を決定的に信仰者にし、それによって同時に、思想する人となっていったという方が適當であろう。60数年間、1日もかかさずに聖書をよみ、変動の激しかった現実社会の中で、真の自由と理想を求めてたえず祈りつづけてきたことが彼女の思想を導き、深め、広め、やがてその生活化へとみのっていったものと思われる。

晩年のもと子は、直接間接の多くの教え子たちの成長とその働きを感謝のうちに見守りながら、自然と人間とをこよなく愛した。最大の伴侶であり、理解者、協力者であった夫吉一が永眠したあと、ひたすら夫のいる天国を思いつつ、その1年半後83歳で昇天した。



それは昭和32年（1957）4月7日であった。

参 考 文 献

- 『羽仁もと子生誕百年記念，生活即教育展』 婦人之友社
- 『羽仁もと子著作集』全20巻，婦人之友社
- 『日本キリスト教教育史，人物篇』キリスト教学校教育同盟篇 創文社
- 『20人の婦人たち』高見沢潤子著，教文館
- 『創立者の歩んだ道・婦人之友小史』婦人之友社